

ロマン派の詩学とロマン主義時代の言語思想

The Development of Poetics and Linguistic Theories in the Romantic Era

伊 藤 健 一 郎

序

本論は擬古典主義時代からロマン主義時代にかけて様々に構築されていった言語思想の変遷を俯瞰し、それがロマン派の詩学の展開とどのような関係を持つのかを考察する。ここで言う「詩学」とは特定の一詩人の詩論に限定されるものではなく、複数の詩人たちの詩論が相互に関連し合って展開していく総体を見据えたものとしての含みを持つ。フォルマリズムにおいて指摘されてきたように、文芸上の革新は言語上のものが多い。ロマン派詩人たちが示した革新も言語的な側面が大きく、それは特にロマン派第二世代のテキストに表れている。彼らの創作活動を支える詩学は、言語を巡るどのような歴史的文脈の中で形成されたのだろうか。

1. 詩学と言語思想の展開を巡る社会背景

言語思想において古代ギリシア時代以来、人間の言語能力は生得的なものか慣用によって獲得されるものなのかが議論的となってきた。20世紀に展開した変形文法は前者の流れを汲むものである。一方1980年代以降急激に発展した認知言語学やコーパスを利用した言語分析は、後者の立場に近いものだろう。また言語に対するアプローチの仕方に関しても、立場は大きく二つに分かれる。一方は実際に運用されている言語を記述するものである。他方は想定された規範に従っている言語を記述するもので、実際の言語運用の正誤を判断する。それらは記述文法（descriptive grammar）および規範文法（prescriptive grammar）と呼ばれる。規範文法における規範自体は主観的なものでしかないが、このような規範主義は近年に至るまで隆盛を極めた。¹

イギリスにおいて規範主義が生れたのは17世紀末から18世紀にかけての頃である。当時、国家の本質はその言語の特質と不可分であると考えられていた。言語の欠点を矯正したり堕落を食い止めたりすることで、国の状態を改善することができる。ナショナリズムの高揚期を迎えたイギリスでは英語を改良し固定化しようという考えが喧伝され、それは18世紀の知識人一般の傾向であった。例えばスウィフト（Jonathan Swift）は1712年に、英語の「矯正、改善、固定化」²を提言している。18世紀が下るにつれて英語に規範を設けようとする運動が盛り上がり、辞書や文法書が輩出した。言語に関

する本の刊行数は、18世紀前半は50にも満たない。しかし後半には200以上のものが出版されている。

ここで着目すべきは、規範主義の隆盛に応じるかのように、矯正の対象でしかなかった大衆の言語運用を擁護する急進的言語理論が展開していったことである。言語思想の変遷を概観してみると、18世紀は専ら現行の運用よりも規範を重視する。18世紀末になると急進的言語理論が台頭し、19世紀初頭にかけて最盛期を迎える。ヴィクトリア朝時代に入るとやや18世紀に近くなり、規範を重視する傾向を示す。この変遷は、擬古典主義からロマン主義文学、ヴィクトリア朝文学という文芸思潮の推移と時期的に一致している。ここからロマン主義の文芸活動と言語思想の変遷、特に急進的言語理論の台頭との間には何らかの関連性があるのではないかという仮説が立てられる。

この両者を関連付ける一つの要因が政治である。1980年代に文学テキストと政治の関連を扱ったジェイムソン（Fredric Jameson）³以降、ロマン主義研究は歴史的な文脈からの情報を重視する批評へ傾倒し、彼らの創作活動の政治的・社会的側面が関心を集める。ロマン派の時代は保守と急進勢力の対立構造が特に顕著な時代だった。これが当時の文化のあらゆる面に影を落とす。従来は最も政治性が認められていなかったキーツ（John Keats）に対しても、「政治的な関心、重要性、関与を欠く詩人と見なすことはもはや不可能になった」⁴とロウ（Nicholas Roe）は指摘し、ハント（Leigh Hunt）との関連からその政治性を論じている。ロマン派第二世代の詩は「ハントを中心とした集団」における「共同活動から生じている」⁵とするコックス（J. N. Cox）の研究も、同様の流れを汲むものだ。

確かに従来の価値観に対して新しい芸術理念を打ち出したロマン派詩人たちには、程度の差こそあれ左派的傾向が認められる。また急進的言語理論は、大衆の政治参加を目指す急進的政治活動と足並みをそろえて展開している。大衆の言語運用を擁護する理論を提示したのは全て政治的に急進派に属する人々だった。ゆえに政治という視点からロマン派の詩学と当時の言語思想を結びつけることは可能だろう。だが上記の現代のロマン派研究はテキストの芸術的価値よりも政治性に焦点を当て、それを強調する嫌いがあるのは否めない。本論はむしろ前者を問題とし、ロマン派詩人のテキスト形成を支える彼らの言語観に焦点を当てる。

社会における英語の意義・重要性は、産業革命後の新興中産階級の台頭による社会構造の変容とともに、劇的な変化を遂げている。イギリスの教育史において英語という科目は比較的歴史が浅く、学校教育カリキュラムの中に定着するのは19世紀半ばを過ぎた頃である。だが18世紀半ばから英語教育を重視する提言が見られ、ロマン派の時代には個人による様々な試みがなされていた。

当時の言語教育状況を T. シェリダン（Thomas Sheridan）は端的にまとめている。彼は劇作家として著名な R. B. シェリダン（Richard Brinsley Sheridan）の父であるが、演劇活動のかたわら言語教育にも大きな関心を寄せている。彼はギリシア語・ラテン語を偏重する言語教育状況を嘆き、その原因を以下のように指摘した。

All this arises from a wrong bias given to the mind, in our course of education, with

regard to two material articles. The first is, a total neglect of our own tongue, from the time and pains necessary to the attainment of two dead languages. The second, an utter inattention to the living language, as delivered to the ear by the organs of speech; from making the written, as presented to the eye by the pen, the sole object of instruction.⁶

もはや「死語」となった古典語の研究は重視される一方、最も有用な英語の教育が無視されている。これは自国語および現代語への無関心という「偏見」に基づく。当代の英語教育がなおざりにされている状態をシェリダンは教育法の欠陥に原因があると考え、後半生の多くを英語教育・弁論術の普及に費やすこととなる。

従来の語学教育は、大学を始めとする高等教育機関における古典語や外国語が中心だった。だが1779年に合法化された非国教徒のアカデミー、および慈善学校や日曜学校のような新興の教育機関は古典語よりも英語に重点を置く。急進的な人々は教育による大衆の識字能力の獲得を肯定的に捉え、彼らの自立や自由に資すると考えた。ペイン（Thomas Paine）の *Rights of Man*（1791）は革命の機運を高めただけでなく、識字能力の普及にも寄与した。また識字能力は大衆に聖書を読むことを可能とし、道徳の向上に役立つとする見方もあった。ハナ・モア（Hannah More）やサラ・トリマー（Sarah Trimmer）は Cheap Repository Tracts と呼ばれる廉価版の啓蒙書を生み出した。それは労働者階級のモラルの向上を目指した教育的な要素の濃いバラッドや物語だった。

これらの活動によりロマン派の時代にかけて中産以下の階級の識字率が急上昇し、読者層の大幅な拡大を見ることとなった。ロマン派詩人たちの創作活動は、この新しい読者層と関連している。このような大衆の読書への志向は、ナポレオン戦争が終ると一層高まる。*The Gentleman's Magazine* の1819年序文には、「安価で教育的価値の高い読書の習慣は、戦時よりも平時において二倍に膨れ上がった」⁷ という指摘がある。新しい読者層の存在は、特にナポレオン戦争後に活動したロマン派第二世代の詩人たちにとって無視できないものだった。彼らは新たに読者層に加わった大衆の嗜好に適う、新しいテキストを創造する必要性に迫られていたのである。

一般に詩人は、先行する詩人に対して常に自らの存在意義を示さなければならない。⁸ ロマン派詩人たちは擬古典主義に代わる芸術理念を打ち出し、従来にはない新しさに自らの存在意義を求める。こうした新しさを提示する際に理論武装するのは歴史上の常套手段であり、彼らのほとんどが詩論を書いている。ワーズワス（William Wordsworth）の『リリカル・バラッズ』（*Lyrical Ballads*）第二版序文、コウルリッジ（Samuel Taylor Coleridge）の『文学評伝』（*Biographia Literaria*）、シェリー（Percy Bysshe Shelley）の『詩の擁護』（*A Defence of Poetry*）などは全て、自らの創作基盤となる詩の理念を説いている。キーツは系統立てた詩論を書いていないが、手紙の随所に詩に関する言説が散見される。

識字率を上昇させ読者層の拡大をもたらした英語教育活動の理論的支柱となったのが、当時の様々な言語思想である。新しい読者層を見据えたロマン派の詩人たちが、テキストの言葉を組み立てる新

しい仕様を模索する際に、当時の言語思想に依拠したとしても不思議ではない。以下、擬古典主義時代からロマン主義時代にかけて展開した言語思想が、どのようにロマン派の詩学に影響を及ぼしているのかを検証する。

2. 擬古典主義時代の規範主義言語思想

18世紀の言語思想の展開において一つの起点となったのはロック（John Locke）だった。1690年に出版された *An Essay concerning Human Understanding* において、言語は政治と同じく社会契約に基づく指摘された。言語は事物ではなく概念を表示する記号であり、自然の結果ではなく恣意的に意味に結び付けられる。彼の唱える経験主義哲学では、人間は白紙の状態で生まれてくるのであり、運用が人間の言語能力を作るとされる。以降、賛否はどうあれロックに対する何らかの反応として言語が論じられることとなる。ロックを援用して運用に基づいた言語理論が出る一方、彼に反駁して言語に備わる法則性を主張する理論も展開される。

運用を重視する立場において比類のない影響力を持ったのが、ジョンソン（Samuel Johnson）による *Dictionary of the English Language* (1755) である。それは規模の大きさと用例の豊富さにおいて、従来の標準的な辞書であったベイリー（Nathaniel Bailey）の *An Universal Etymological Dictionary* (1721) をはるかに凌駕するものだった。

ジョンソンの辞書編纂プロジェクトは、急速に台頭しつつある中産以下の階級の運用が英語を頽廃に陥れている、という危機感に促されたものだ。こうした見方は18世紀の通念であった。R. B. シェリダンの喜劇 *The Rivals* に登場するマラブロップ夫人は同じような発音の言葉を混同し、18世紀のこのような考え方を例証する事例の一つとなっている。ジョンソンの意図は、現行の運用による英語の頽廃を規範の設定によって防ぐことにあった。彼は1747年の構想の段階で辞書出版の目的を、「英語の純粋さを保存し、その意味を確定すること」と明言している。その規範としてジョンソンが依拠したのは伝統的な作家の運用例である。その3分の1は「汚されていない英語の源泉」としてシェイクスピア（William Shakespeare）、ミルトン（John Milton）、ドライデン（John Dryden）のテクストから採られている。彼にとって英語のモデル・スピーカーとは、このような作家に親しむに足る教養を身につけた上流階級の人間だった。それは、ある特定の仕事に従事して特殊な言葉遣いに毒されたり、地元に縛られてその土地言葉に影響されることのない財政的基盤のある人間でなければならない。一般大衆の運用は「絶えず増えては減んでゆく状態にある一時的な流行語」であり、規範とはなりえなかった。⁹

伝統的な実例をもって英語の規範とする態度はジョンソンに特有のものではない。ドライデンはチャウサー（Geoffrey Chaucer）に、スウィフトはエリザベス朝に純粋な英語の起源を見る。ただし後代に与えた影響力においてジョンソンに比肩するものはない。T. シェリダンはジョンソンの辞書が将来の英語の礎石となるとして讃え、ジョンソンが成しえなかった発音と綴り字においても、不変の規範を立てることを目指した。またキーツは、「言語が実際にどれほど使われ、どれほど偉大なのかを

知るには、その文学に照らしてみればいい」¹⁰と手紙に記す。伝統的文学テキストの運用例を称賛する点で、ジョンソンと同じ態度を彼は示している。

ここで留意すべきは、言語運用を重視するジョンソンの態度は現代の記述文法と一線を画するものであることだ。彼が運用を重視する立場に立ったのは、単に英語のように活用の少ない言語では細かい文法規定は不要と考えたからだった。彼の辞書において統語論に関する記述はわずか10行に過ぎない。ジョンソンの態度は現行の運用を伝統的な運用によって規制しようとするものであり、規範主義の枠を出るものではない。この点において、言語に対するジョンソンとキーツの態度は峻別されることとなる。

18世紀にはジョンソンとは対照的に、英語に内在する規則性を明らかにし、規範的な文法を設定しようとする動きも隆盛を見る。その嚆矢となったのは、ハリス（James Harris）が1751年に出した *Hermes: or, A Philosophical Inquiry concerning Language and Universal Grammar* である。彼は「知性の全ては感覚に基づく」というロックの経験主義を振って「感覚の全ては知性に基づく」と主張し、人間の精神的能力の視点から言語を論じている。言語思想においてはベーコン（Francis Bacon）以来、普遍言語（universal language）の考え方があったが、その流れに沿ってハリスは全ての言語に本質的な「普遍文法」（universal grammar）を想定する。言語は思考の反映であり、思考は万人に共通である。ゆえに言語に本質的な諸原理は共通である。ハリスは個々の言語を、単一の「普遍文法」が様々な形で現れたものと考えた。¹¹

「普遍文法」は現代の言語学にも存在する概念だが、ハリスの「普遍文法」はラテン語をそのモデルとしている点で現代とは異なる。当時の言語研究の中心的対象は古典語であり、その完成度・価値において古典語は英語を凌駕するというのが通念だった。ハリスがラテン文法に依拠して英文法を論じたのは、当時としては当然の帰結だった。

18世紀も後期になると、古典語のモデルを廃し純粹に人間の精神的能力に基づいて規範を設定しようとする文法理論が構築された。その先陣を切ったのは、ラウス（Robert Lowth）による *A Short Introduction to English Grammar* だった。彼の英語観は著書全体の一割にも及ぶ序論にまとめられ、文法を学ぶ意義が以下のように説かれる。

The principal design of a Grammar of any Language is to teach us to express ourselves with propriety in that Language, and to enable us to judge of every phrase and form of construction, whether it be right or not. The plain way of doing this, is to lay down rules, and to illustrate them by example. But, besides shewing what is right, the matter may be further explained by pointing out what is wrong.¹²

ラウスの掲げる文法の主目的は、「言語で正確に表現し、文の語句や構文の正誤を判断できるようにすること」にある。彼が主張する規範としての文法の機能は、具体的な適用例を示すことによって

説明される。この用例を集めたノートはラウスの文法書全体の半分を占める。そこで彼が強調するのは、「何が正しいのか」よりもむしろ「何が間違っているのか」を示す点である。ジョンソンが伝統的作家の運用例から正しい英語の規範を策定したのに対し、ラウスはこうした作家の運用例でも、彼の基準に合わないものは誤用として扱う。文法は「全ての文学が拠って立つべき真の基盤」(Lowth x) であり、ジョンソンとは逆の態度をとっている。

運用に対する規範としての文法の地位を支えるのが、「普遍文法」の思想である。ラウスはハリスを称賛し、「普遍文法」の概念を英文法理論の構築に適用しようとした。「普遍文法」は「全ての言語に共通する原理を説明するもの」であり、英語のような個々の言語の文法は「この共通の原理が個別の言語に適用されたもの」(Lowth 1) だとされる。

その際ラウスの理論において画期的だったのは、言語を論理的な体系とみなし“reason”「理性」に基づいてその法則性を明らかにしようとした点である。ラウスは文法とは「言葉によって思考を正確に表現する術」(Lowth 1) であると指摘する。すなわち、個々の運用例から導き出される法則性ではなく、人間の理性的思考の反映として言語に法則性を求めたのである。ハリスとは異なり、ラウスはいたずらにラテン語の文法を英語に適用させようとはしない。理性に照らして文法を論理的に説明しようとする態度は、ラウスの理論の随所に見られる。例えば動詞論において、ラウスは叙実法、命令法、仮定法、不定法、分詞を英語における動詞の法として挙げている。彼は動詞の形によって区別される以上に法の区別はないと指摘し、「普遍文法」の理論でいくつの法があろうとも英語には上記以外の法はないとする。そしてギリシア語、ラテン語におけるそれぞれの実例と英語を比較し、英語は英語で独自の法則性を備えているという態度を示している (Lowth 29-63)。

このような点からラウスの文法理論は英語の最初の規範文法と呼ばれ、18世紀に登場した言語理論の中で最も影響力を持つものとなった。1762年に上梓されて以来、18世紀中に少なくとも22版は出たと言われる。¹³ さらに1811年には最初のアメ리카版が出版された。またラウス以降、その流れに沿った理論を多くの人物が提示した。James Buchanan (1762), John Ash (1763), William Ward (1765), Robert Baker (1770), Anselm Bayly (1771), Lindley Murray (1784) などは全てラウスの系列に属する。その中のウォードはラウスの理論に関して、「一流作家の文法違反の例を示している点で当を得たもの」であり、「誤った言語的慣用を指摘した点で、英語英文学を尊重する人たちの大きな感謝に値する」¹⁴ と述べ、その功績を讃えている。

こうした考えは、ロマン派詩人の中でも特にコウルリッジに引き継がれている。¹⁵ 言語には我々が実際に日常使うものの他に「精神の言語、内的な言葉」があり、前者は単に後者の「伝達手段」にすぎない (BL I 290)。文法とは「普遍的な論理法則」“the laws of universal logic” (BL II 52) であるとして、次のように述べている。

The best part of human language, properly so called, is derived from reflection on the acts of the mind itself. It is formed by a voluntary appropriation of fixed symbols to

internal acts, to processes and results of imagination, the greater part of which have no place in the consciousness of uneducated man; (BL II 54)

ここでコウルリッジは、「人間の言葉の最良の部分は、心そのものの活動についての深い省察からくる」としている。言語は精神活動の反映であり、「内部的活動」に欠ける「教養のない人々」の言葉は詩語として相応しくないと態度を示す。ここから彼は、ワーズワスの詩論を批判することとなる。

18世紀後半にはラウスの文法理論やジョンソンの辞書を典拠として、英語を流行語や新造語、低俗語から擁護する語法改善運動 (elocution movement) が起こり、多くの理論家、教育者がそれに参与した。これらは伝統的作家や上流階級の運用例によるにしろ、言語に備わる法則によるにしろ、何らかの規範によって一般大衆の言語運用を規制するものである。大衆の用いる言葉には、言語としての価値が認められていなかったのである。

3. ロマン主義時代の急進的言語思想

18世紀末になると従来の規範主義の枠組みを崩し、矯正の対象でしかなかった一般大衆の運用を擁護する理論が現れる。その先鞭をつけたのは、酸素の発見者として知られるプリーストリー (Joseph Priestley) である。彼は英語の文法は英語の運用に基づくべきだと主張し、英文法をラテン文法の枠組みから解放することを目指した。その態度は、ラウスとほぼ同時期に上梓された彼の文法書 *The Rudiments of English Grammar* において示されている。

It is possible I may be thought to have learned too much from the Latin idiom, with respect to several particulars in the structure of our language; but I think it is evident, that all other grammarians have learned too much to the analogies of that language, contrary to our modes of speaking, and to the analogies of other languages more like our own. It must be allowed, that the custom of speaking is the original, and only just standard of any language.¹⁶

プリーストリーは現行の英語運用を忠実に観察して、そこから則るべき規範を割り出そうと努めた。彼にとっては、「話し言葉の慣習こそ、その言語の本源的で唯一の正しい基準」だった。

実際の言語運用を重視する態度そのものはジョンソンに通じ、新しいものではない。プリーストリーとジョンソンの決定的な相違点は、いたずらに古きよき時代の英語に憧憬を抱かない点である。「一般に流布している語法こそが、それが流布している間は唯一の基準となる」とプリーストリーは主張する (Priestley 12)。彼はスウィフトやアディソン (Joseph Addison) らの運用に英語の一つの基準を求める。だがこれは、彼の言語理論が規範主義の要素を多分に残していることを意味する。現行

の運用の中には、あまりに低俗として退けられる用例も少なくなかった。

ジョンソンに相対する態度をより鮮明に打ち出して、大衆の言語運用を積極的に擁護したのがグロース（Francis Grose）である。彼はバーンズ（Robert Burns）のパトロンでもあり友人でもあった。1785年に出版された *Classical Dictionary of the Vulgar Tongue* は、“Classical” と “Vulgar” の撞着語法による題名が示すように、ジョンソンの辞書のパロディである。彼は “the most classical authorities” 「最も古典的な典拠」を「兵士」や「漁師」, 「女性」, 「渡し守」などの「口語体」¹⁷に求めた。ジョンソンが一般大衆の語法は一時的なもので記録する価値がないとしたのに対し、グロースはその大衆言語の変わり易さを英国の自由が生み出したもののだとして称揚する。英国の政治体制による思考と表現の自由は、まさに大衆の言葉にこそ表れているのである。

急進的言語思想を展開した人々の中でコベット（William Cobbett）は最も商業的な成功を収めた。1818年に出版された *A Grammar of the English Language* は僅か1ヶ月で10,000部の売上げを記録した。¹⁸

コベットは農家から身をおこして国会議員に進んだ急進的な政治家であり、労働者階級が政治に参加できるようにとの意図で文法書を書いた。文法は言葉の使用法を教え、いかなる人にも文法は有用なのである。この著書のとびらには、「兵隊、水兵、徒弟、若い農夫」¹⁹のために書かれたものだと記されている。彼にとって言語は下層階級の運用によって墮落させられたのではない。むしろ一般大衆の政治参加を阻み、不公正な政治機構を維持しようとして一部のエリートに独占的に用いられる言語運用こそが、言語全体の墮落を生んでいるのであった。

急進的言語思想の中で最も影響力を持つ理論を提示したのは、トゥック（John Horne Tooke）の *Epea Pteroenta or the Diversions of Purley* である。彼は言語の目的を二つ挙げ、「我々の思考を伝達すること」と「その伝達速度を速めること」²⁰としている。前者は彼が批判するハリスやラウスに準じるものであり、彼の理論を特徴付けているのは後者である。書名の “Epea Pteroenta” はギリシア語で、直訳すると “winged words” となる。ここに、言語は迅速に飛ぶ翼を供えているという彼の言語観が現れている。

トゥックは、運用が伝達速度の向上を志向する結果生じる言語上の「省略」（Tooke I 45）に着目する。言語を論じるには省略をもとの形に直して考える必要があるとし、語源学的なアプローチを採る。彼は言語を二種類に分類した。意味内容を持つ語すなわち内容語と、伝達速度を速めるのに使われる語すなわち機能語である。機能語は内容語から派生したものであり、究極的に全品詞は名詞と動詞に還元できるとされる。

The business of the mind, as far as it concerns Language, appears to me to be very simple. It extends no further than to receive impressions, that is, to have Sensations or Feelings. What are called its operations, are merely the operations of Language. A consideration of Ideas, or of the Mind, or of Things (relative to the Parts of Speech), will

lead us no further than to Nouns: i.e. the signs of those impressions, or names of ideas. The other Part of Speech, the Verb, must be accounted for from the necessary use of it in communication. (Tooke I 49)

名詞と動詞が品詞の最重要部分であるというのは、プロタゴラスやプラトンの時代から唱えられており、新しい考えではない。ここで留意すべきは、言語の起源を感覚が受け取る印象に求めている点である。感覚作用に基づく名詞と動詞は全ての品詞の元であり、これらが人間の精神活動を反映している。言語は純理性的な精神活動の反映なのではない。彼はハリスやラウスの言語理論を真っ向から否定し、現代英語の起源をアングロ・サクソン語にまで遡っている。言語に関する人間の精神活動は「非常に単純」なものであり、トゥックにとって無教養な大衆こそが言語を発展させてきたのである。

トゥックの理論は現代言語学の見地に立つとほとんど価値が認められない。トゥック自身、自分の理論に破綻をきたしている部分があり、動詞論を十分に展開しないまま断章に終わっている。彼の理論の重要性はそれが歴史的にどのような意義を持ったかという点にある。それを示すのが、以下のハズリット（William Hazlitt）によるトゥック評価である。

Mr. Tooke, in fact, treated words as the chemists do substances; he separated those which are compounded of others from those which are not decomposable. He did not explain the obscure by the more obscure, but the difficult by the plain, the complex by the simple.²¹

ハズリットの評価は、トゥックの理論の持つ意義について次の二点を教えてくれる。第一に、トゥックは科学的手法を言語分析に応用したという点である。全品詞が動詞と名詞に帰せられるという理論は、「科学者が物質を扱う」かのように実例を観察する実証的態度の結果なのである。実際の言語運用においては、内容語、中でも主部、述部を形成する名詞と動詞が意味伝達の中心となる。その一方で機能語は省かれる傾向にある。これはあらゆる時代において普遍的に観察される現象である。階級が下れば下るほど、教育水準が下がれば下がるほど、その傾向は強くなる。トゥックはこうした現実に見られる現象を破格として切り捨てるのではなく、理論的な裏づけを与えようとしたのである。

第二に、トゥックの理論は難解複雑な現象を平明単純なもので説明しようとしたという点で評価できるということである。彼は観察不可能な精神活動ではなく、観察可能な実例を起点に理論を構築している。この態度はハズリットに大きな影響を与え、彼自身も文法書を上梓し、「英語の原理を実際にあるがままの姿で説明する」（CW ii 5）ことを試みた。ハズリットが指摘するこれらの態度は、ロマン派の詩学にも引き継がれている。

4. 言語思想とロマン派の詩学の関連性

ロマン主義の幕開けを告げる決定的な詩論を提示したのはワーズワスである。『リリカル・バラッズ』1800年版の序文では、擬古典主義以来の詩語の放棄と、それに代わるものとして「人々の現実の言葉」の採用が宣言される。その目的は「自分の言葉を人々の使う言葉に近づけたかったから」だと彼は述べる。ワーズワスは詩語の起源を辿って、最も初期の詩は普通の会話の言葉の中で生まれたと主張する。ここで展開される詩論には、急進的言語思想との共通点が認められる。

The language too of these men is adopted (purified indeed from what appear to be its real defects, from all lasting and rational causes of dislike or disgust) because such men hourly communicate with the best objects from which the best part of language is originally derived; and because, from their rank in society and the sameness and narrow circle of their intercourse, being less under the action of social vanity they convey their feelings and notions in simple and unelaborated expressions. Accordingly such a language arising out of repeated experience and regular feelings is a more permanent and a far more philosophical language than that which is frequently substituted for it by Poets, who think that they are conferring honour upon themselves and their art in proportion as they separate themselves from the sympathies of men, and indulge in arbitrary and capricious habits of expression in order to furnish food for fickle tastes and fickle appetites of their own creation.²²

ワーズワスは「田舎の人々」が実際に用いている言葉を詩の言葉として採る根拠を、二点挙げている。第一に、「田舎の人々」は「言語の最良の部分が生まれることとなる最良の事物と絶えず交わっている」点である。ここでいう「事物」とは自然の事物を表す。すなわち言語は、ラウスの主張するような理性的な精神活動によるものではない。このような見方は、自然の事物が感覚に与える感覚作用から名詞と動詞が生れたとするトゥックの理論と共通する。

第二は、「田舎の人々」はその感情や思考を「単純で凝っていない表現」で伝えることができる点である。この見方は、伝統作家の用法を英語の最も洗練された形としたジョンソンと対立する。ジョンソンの考えでは、「田舎の人々」の言葉は特定の土地・職業に活動が限られて特異なものとなるがゆえに、頽廃として矯正の対象となった。ワーズワスにとってそれは、彼らの階級的特性によってその活動が限られているからこそ、「社会の虚栄」に毒されることなく純粹さを保っている。ジョンソンが彼らの言葉の変わりやすさを非難したのに対し、ワーズワスは「より恒久的ではるかに哲学的な言葉」だとしてその価値を称揚する。ジョンソンが規範とした伝統的な詩人の言葉こそ、「人々の共感」から遠ざかる「恣意的」かつ「気まぐれな」表現なのである。このようにワーズワスの詩論はジョ

ンソンやラウスのロジックとは全く逆に展開している。それはむしろ、大衆の言語運用の価値を認め擁護するトゥックの態度に通ずるものだ。

ワーズワスの詩論は文芸上の一つの革新をなすものだったが、そのテキストは詩論の完全な実現ではなかった。ワーズワスの言葉は「疑いもなくあらゆる階級に日常的に使用されている言葉」だが、「これらの言葉の配列は、片田舎の牧羊者や農夫らが言葉を並べる時の順序であろうか」(BL II 59)と、コウルリッジは批判する。

ワーズワスのテキストにおいては、単純な語彙と複雑な統語構造の対立が一つの表現手法として機能している。このことをウィドソン (H. G. Widdowson) は、‘Tintern Abbey’ の一節を題材に分析した。ワーズワスの文体においては、「日常生活から読者を引き離すような複雑な統語パターン」と、「読者の日常的体験においてなじみあるものを表す非常に単純な語彙」が「対立」している。これにより、読者は日常のありふれた存在に人智を超えた捉えがたい力を感じ得る。ワーズワスの「ヴィジョンの本質」は、「彼の文体の特徴ともいえるこの対立」によって表現されているとウィドソンは指摘する。²³

コウルリッジによると、ワーズワスの詩論は本質的に矛盾を抱え「実行不可能」(BL II 58)なものである。ラウスやハリスに近い立場に立ち、言語の本質を “the laws of universal logic” とするコウルリッジにとって、「内部的活動」に欠ける「田舎の人々」の言葉は “philosophical” で “permanent” なものではない。彼による「人間の言葉の最良の部分は、心そのものの活動についての深い省察からくる」という言説は、ワーズワスを振ったものだ。「ワーズワス氏の詩から、彼の序文に述べた理論を厳密に守った結果、排除されることになる一切を取り除いたならば、彼の詩の特に美しい点の3分の2は抹殺されてしまわなければならない」(BL II 106)と、コウルリッジの批判の舌鋒は鋭い。

ワーズワスの詩論とテキストとの乖離に、第二世代の詩人たちは自身の創作活動の意義を求める余地を見出した。ゆえに彼らにとって重要なのは、ワーズワスによって示された理念を実現するための手段だったと言える。シェリーは『詩の擁護』において「新しい詩人」の意義を次のように述べている。

Their [poets'] language is vitally metaphorical; that is, it marks the before unapprehended relations of things, and perpetuates their apprehension, until the words which represent them, become through time signs for portions or classes of thoughts instead of pictures of integral thoughts; and then if no new poets should arise to create afresh the associations which have been thus disorganized, language will be dead to all the nobler purposes of human intercourse.²⁴

詩人の言葉は「不可欠的に比喩に富むもの」であり、その機能は「それまでは理解されなかった事

物の関係を明らかにする」ことにある。だがその言葉も時が立つと効力を失う。詩人の言葉は、ジョンソンのように規範として固定化されたものとは捉えられていない。むしろそれは、「解体されてしまった連想をあらたに創造する」ものだ。ここに「新しい詩人」としての意義を見出すのである。

ここで留意すべきは、比喩表現の機能に言及している点である。シェリーは *The Cenci* の序文において、「人々を真の共感へと動かすためには人々になじみの言葉を用いなければならない」(Shelley 144) と述べ、ワーズワスと同様の態度を示す。だがそれは「田舎の人々」の言葉を忠実に模倣することで達成されるのではない。主に都市部で活動した第二世代の詩人にとって、「人々の現実の言葉」とは「田舎の人々」の言葉に限られるものではなかった。むしろ自らの属する言語使用域に基づいて、「人々の共感」を得るテキストを創造しなければならない。その手段の一つとして彼らが重視したのが比喩表現なのである。比喩表現は単なる修辞上の問題ではない。「それまでは理解されなかった事物の関係を明らかにする」機能を持ち、人間の精神活動に不可欠なものなのである。これは「想像力が美と捉えるものは真である」(LI 184) と主張するキーツにとっても同様である。

このような比喩表現に対する考え方はトゥックの理論と共通点を持ち、大衆の言語運用を見据えたものである。比喩表現の核を構成するのは名詞や動詞などの内容語である。トゥックは、全ての品詞は名詞と動詞に還元できるとし、それらが人間の意志伝達の中心をなすと主張した。この理論は実際の大衆の言語運用を観察することから帰納される。すなわち比喩という表現手法は、大衆の言語運用に親しいものなのである。ワーズワスの複雑な統語構造は、コールリッジの言う「内部的活動」に欠く「無教養な人間」には理解しがたい。それに対し比喩表現は、新たに読者層に加わってきた大衆に訴えることができる。

現代では比喩表現が文学上の修辞的な一技法としての地位を越え、人間の概念構造の形成に重要な役割を担っていることが認められている。²⁵ シェリーやキーツが比喩表現を単なる文彩ではなく、人間の精神活動の本質に関わるものと見ていたのは明らかだ。それは、自然の事物がもたらす感覚作用から名詞と動詞が生れたとするトゥックの理論においても同様である。トゥックの理論自体は未熟なままに終ることとなったが、その影響はロマン派の詩人たちによって発展させられてゆくのである。

結

18世紀の見方では人間の精神活動は言語と対応しており、言語に内在するとされた普遍的法則、または伝統的カノンとして権威が確立されている作家の用例によって規定される。だがロマン派の時代は人間の精神活動と言語に関する全く新しい理論が登場し、大衆の言語運用に価値を見出した。確かにこうした急進的言語理論はその影響力を長期に渡って保ち続けることはできなかった。だがそれは、従来の言語を巡る価値体系に新たな視点を導入し、価値の転換を惹き起こしたのである。言葉に対して鋭い感受性を持ち、新たに読者層に加わってきた大衆を見据えていた詩人たちがその影響を受けるのは、当然の帰結だったと言えよう。

注

- 1 Randolph Quirk et al., *A Comprehensive Grammar of the English Language* (New York: Longman, 1985) 3-34.
- 2 Jonathan Swift, *A Proposal for Correcting, Improving and Ascertaining the English Tongue: In a Letter to the Most Honourable Robert Earl of Oxford and Mortimer, Lord High-Treasurer of Great-Britain*, 1712, Takanobu Otsuka, ed., *A Reprint Series of Books Relating to the English Language*, 21 vols. (Tokyo: Nan'undo, 1967) 11: 155. (以下, RSEL)
- 3 Fredric Jameson, *The Political Unconsciousness: Narrative as a Socially Symbolic Act* (Ithaca, N. Y.: Cornell UP, 1981). ジェイムソンはマルクス主義文学批評の立場から、外見上最も非政治的な文学作品でもフロイトの無意識のように、テキストの表面下に政治的内容を持っていると論じている。
- 4 Nicholas Roe, *John Keats and the Culture of Dissent* (Oxford: Clarendon Press, 1997) 6.
- 5 Jeffrey N. Cox, *Poetry and Politics in the Cockney School: Keats, Shelley, Hunt and their Circle* (Cambridge: Cambridge UP, 1998) 7.
- 6 Thomas Sheridan, *A Rhetorical Grammar of the English Language*, 1783, RSEL (1968) 15: 267.
- 7 Sylvanus Urban, *The Gentleman's Magazine: and Historical Chronicle: From January to June, 1819* (London: Nicholas, Son, and Bentley, 1819) iii.
- 8 Harold Bloom, *Agon: Toward a Theory of Revisionism* (Oxford: Oxford UP, 1982).
ブルームは、後発詩人と強力な先行詩人との間の葛藤を「アゴーン」と呼んで論じている。彼の理論によると、現代詩人にとって独創的な詩を書くということは、創作の可能性をすべて剥奪するかに思える先行詩人と闘争をくりひろげることである。
- 9 Samuel Johnson, *The Plan of an English Dictionary: To the Right Honourable Philip Dormer, Earl of Chesterfield, one of his Majesty's Principal Secretaries of State*, 1747, RSEL (1967) 11: 203.
- 10 Hyder E. Rollins, ed., *The Letters of John Keats: 1814-1821*, 2 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1958) I 155. (以下, L)
- 11 James Harris, *Hermes: or, A Philosophical Inquiry concerning Language and Universal Grammar*, 1751, RSEL (1971) 12: 10-14.
- 12 Robert Lowth, *A Short Introduction to English Grammar: with Critical Notes* (London: J. Hughs, 1762) viii-ix.
- 13 Albert C. Baugh, *A History of the English Language* (London: Routledge & Kegan Paul, 1951) 339.
- 14 William Ward, *A Grammar of the English Language in Two Treatises*, 1767, RSEL (1968) 15: 14.
- 15 コウルリッジの引用は全て, James Engell and W. Jackson Bate eds., *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge: Biographia Literaria or Biographical Sketches of My Literary Life and Opinions*, 2 vols. (Princeton: Princeton UP, 1983) に拠り, BL と記す。
- 16 Joseph Priestley, *The Rudiments of English Grammar*, 1762, RSEL (1971) 14: 11.
- 17 Francis Grose, *A Classical Dictionary of the Vulgar Tongue*, 1785, R. C. Alston, ed., *English Linguistics 1500-1800: (A Collection of Facsimile Reprints)* (Menston: The Scholar Press Ltd., 1968) No.80: v. (以下, EL)
- 18 *The Encyclopaedia Britannica* (9th ed., Edinburgh: Adam and Charles Black, 1877) vi 84.
- 19 William Cobbett, *A Grammar of the English Language, In a Series of Letters*, 1819, RSEL (1970) 20: 147.
- 20 John Horne Tooke, *Epea Pteroeonta or the Diversions of Purley*, 1798, 2 vols., EL (1968) No.127: I 27.
- 21 P. P. Howe, ed., *The Complete Works of William Hazlitt*, 21 vols. (London: J. M. Dent and Sons, Ltd., 1931) xi 55-56. (以下, CW)
- 22 ワーズワスの引用は全て, Duncan Wu ed., *Romanticism: An Anthology*, 3rd ed. (Malden: Blackwell Publishing, 2006) 495-507に拠る。
- 23 H. G. Widdowson, *Stylistics and the Teaching of Literature* (London: Longman, 1975) 43-45.
- 24 Donald H. Reiman ed., *Shelley's Poetry and Prose*, 2nd ed. (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 2002) 512.
- 25 George Lakoff and Mark Johnson, *Metaphors We live By* (Chicago: U of Chicago P, 1980). このレイコフとジョンソンの著作によって、比喩表現への言語学的アプローチは大きく転換した。彼らは、概念体系は根本的にメタファーによって成り立っているとする。それによりメタファーは言語の問題から概念の問題へと移行した。この20年の間に認知意味論において、「概念メタファー」を始めとする彼らの見解の有効性が実証されている。